第１回新宿区文化芸術振興会議（第２期）　議事要旨

■開催日時　平成２４年１０月１８日　午後３時から午後５時まで
■開催場所　新宿区役所本庁舎６階　第３委員会室
■出席者　　中山弘子新宿区長
　委員　　垣内恵美子　高階秀爾　今沢章信　大津司　乗松好美　大野順二
　　原口秀夫　大和滋　佐藤清親　舟橋香樹
　　（欠席　星山晋也）
　　＊敬称略
　事務局　　加賀美地域文化部長　橋本文化観光課長　菊地文化観光係長　楠原主任
　　島田主事

■議事の進行
１　開会
　会長選出までの間、橋本文化観光課長が会議の進行を務めた。
２　委員の委嘱
　事務局が委員の紹介を行った後、中山新宿区長が各委員に委嘱状を交付した。
　＊任期：平成２６年９月８日まで
３　区長あいさつ
　中山新宿区長が、会議の開催にあたり、挨拶を述べた。

〈あいさつ要旨〉
・区では「文化芸術創造のまち　新宿」を実現していくために、平成２２年４月に新宿区文化芸術振興基本条例を施行した。この条例は文化芸術の振興に関する基本原則を定めており、そこにかかわる方々、区民、それから文化芸術活動団体、学校、企業等、条例で定める「私たち区民」の役割とあわせて、区の責務も明らかにしている。
・この文化芸術振興会議は、条例によって設置されている。文化芸術活動等を持続的、継続的に促進していくための基本的な事項について、調査審議していただくとともに、区の文化芸術の振興に関する進行管理もしていただきたい。
・２４年９月に、第１期の会議が２年間にわたる調査審議の報告をまとめ、私たち区民の活動をより効果的なものとするための意見をいただいた。
・第１期での意見を第２期にもつないで、さらに調査審議を進め、区の責務、それからそれぞれの主体の活動を促進できるような審議をしていただきたい。
・委員の皆様には、新宿のまちの文化芸術の持続的な、かつ、より新宿らしい振興について、さまざまな視点から、幅広くご審議をいただけるものと確信している。
・この会議で活動いただけることを本当に心からありがたいと思っており、感謝を申し上げるとともに、この会議が実り多いものとなるよう、事務局もしっかりバックアップをしていくことを皆様に誓い、挨拶としたい。

４　会長の選出

新宿区文化芸術振興会議規則第４条第１項及び第２項の規定に基づき、委員の互選により、全員一致で、高階委員を会長として選出した。

５　会長あいさつ

高階会長が、会長就任にあたり、挨拶を述べた。

６　副会長及び専門部会員の指名

新宿区文化芸術振興会議規則第４条第２項に基づき、高階会長が垣内委員を副会長として指名した。

また、同規則第６条の規定に基づき専門部会の設置が決定され、同条第２項の規定に基づき、高階会長が、垣内副会長、大和委員、大野委員を専門部会員として指名した。

７　委員の自己紹介

各委員が、新宿区文化芸術振興基本条例第１９条第３項に規定する選出分野の立場から、自身の日頃の文化芸術に係る活動内容等、自己紹介を行った。

８　議事（要旨）

（１）本日の進行は、次第によることとし、議事については、事務局からの資料説明の後、質疑等を含めて意見交換を行うことを確認した。また、検討内容の取りまとめと資料として保存することを目的として、会議を録音することについて、各委員の了承を得た。

（２）「新宿区文化芸術振興会議第 1 期報告書について」及び「新宿区文化芸術振興会議の運営（進め方）について」

資料２－１、資料２－２及び資料３に基づき、事務局が一括して説明を行った。

（３）この会議の基本的な調査審議事項として、「懇談会報告書で提言された２８項目への取組状況」を確認していくことが決定された。

（４）この会議で審議する独自テーマについて、専門部会で整理をして、次回会議で決定することが確認された。

（５）今後の会議の運営（進め方）について、資料３で示す形で会議を開催し、議論を進めることが確認された

（６）意見交換

ア　第２期会議の調査審議事項について

・新宿のまちの文化面の状況を再認識する、あるいは、新宿の歴史性・多様性を顕在化していき、認識を深める議論がなされ、その過程で２８項目の提言がなされた。
・２８の提言を包括的、全体的に実現するために、第１期会議でフィールドミュージアムの取り組みを実現させた。
・この会議の議論の基礎になるのは、新宿区の現状をきちんと押さえた上で、２８の提

言を引き続き検証していくことが重要であり、その中で次のステップがまた見えてくるのではないか。
・２８項目の提言とは別に、この会議独自のテーマ設定を行うこととし、専門部会で論点整理を行ったうえで、第２回会議で決定することとしたい。

イ　「私たち区民」で取り組む文化芸術創造、区内における文化芸術の振興状況、この会議への期待等について

・企業、特に日本の場合は、江戸時代から商人が芸術文化を支援してきたという背景がある。
・近年もＣＳＲという言葉があるように、社会貢献が非常に強く意識されている。
・アメリカ的に起業して、上場して、会社を売却して儲けるという考えではなく、企業の経営を通じて社会をよくしていく、あるいは社会問題を解決していくというソーシャルビジネスの考え方が日本の企業の根幹にもあるように思う。
・社会自体が文化芸術の重要性を強く意識するほど、企業は文化芸術に対して支援をしていくようになると思う。
・企業参加を促す意味では、新宿フィールドミュージアムの取り組みは、非常に大きな効果、影響があると期待している。
・フィールドミュージアムには幅広いジャンルの活動が含まれているが、それがいいことでもあり、実はイメージを拡散しているのではないかという懸念がある。
・核となるテーマやイベントが設定されていると、フィールドミュージアムというイメージをアピールしていきやすい。
・例えば音楽、美術、あるいは歴史に関する活動のような、ある程度のくくりでテーマをまとめて、それが特定の週にまとまって開催されることがあってもいいと思う。
・「来て、見て、楽しい」というコンセプトを実感してもらうことが目標のひとつになっており、フィールドミュージアムの内容を効果的に演出するということが非常に大事であり、そのプロデュースは大変難しいが、やっていかないといけない。
・例えばデザイナーやクリエーターに、アドバイザーとして協力してもらえれば、新しい発想が出てくるのではないか。
・どのぐらい「来て、見て、楽しい」を体感してもらっているか、具体的な目標の基準、成果指標をある程度決めて、どこまで達成しているか毎年評価していくことが必要である。
・評価しながら修正していくということで、成果がますます広がっていく。
・学校の関わり方として、例えば人材育成の場に、このフィールドミュージアムのあり方がどう関係してくるかが気になっている。連携、コラボ、人材育成等の視点が入ってくるのではないか。
・前回のフィールドミュージアムの検証に、以上のような視点を入れることができていれば、今回のフィールドミュージアムについて、学校の関わりがもっと明確になったのではないか。
・年間を通じて、あるいはプレやアフター等、もう少し弾力的な扱いが可能であれば、

フィールドミュージアムに関わりたいという意識を持っている団体、学校、企業等が踏み込んでくることができると思う。

- 義務教育の小・中学校に関しては、区の教育委員会も、この会議、あるいは、フィールドミュージアムの取り組みにいつも連携をとるようなスタンスでないといけない。
- 人と人の連携、あるいは組織と組織の連携が非常に重要になってくる。
- 例えば、高校生の場合は、フィールドミュージアムの取り組みに３年間も関われば、大人顔負けの役割を果たせるのではないか。
- この取り組みに関わりながら成長してきた子どもたちは、次世代のフィールドミュージアムのあり方や、なにか新しい提言ができるような立場になっていると思う。
- フィールドミュージアムの試行実施から、プロデュースであったり、クリエイトであったり、核となるようなテーマ性を持たせた発信であったり、そういうものにどう取り組んでいくかという課題が出てきた。
- まずネットワークとして、美術館同士のネットワークができないか。例えば、区内には損保ジャパン東郷青児美術館や佐藤美術館があるので、美術館関係のネットワークのような、専門的なネットワークが必要だと思う。
- 美術館以外にも劇場群があるので、それらの連携も構築することが必要である。
- それらの連携だけでなく、義務教育とも連携を図ることも考えなくてはならない。
- また、文化芸術とビジネスとの関係のようなコーディネートを行っていくことも必要であると思う。
- クリエーターがよいのかプロデューサーがよいのか、専門的な力がそろそろ必要な時期になってきている。
- 昨年度のフィールドミュージアムの活動を通して、ネットワークづくりができてきているという状況なので、次にもう一歩、何か進めるためには、マネジメントやコーディネートの専門性が必要である。
- 渋谷、池袋、あと高円寺のようなところでいろいろな専門的な芸術関係の施設ができ上がってきている。その中で新宿、新宿力をさらに引っ張っていくためには平均的な、総花的なものだけではない「何か」が必要なのではないか。
- 今やっている義務教育に関与する活動とフィールドミュージアムとが、あまり直結していない。
- 実際にフィールドミュージアムでの活動を見ると、それぞれが独立して活動している。文化月間中に、それぞれの美術館がやっている催しを挙げてあるだけのように思う。
- 期間中の催し物をこのフィールドミュージアムという全体の取り組みの中へ提供していること自体は最低限必要なことであるが、例えば美術館同士の横の連携とか、そのようなコラボレーションのことをそろそろ考えなければいけない。
- 一般論として、例えば渋谷にヒカリエができて、東急東横線と副都心線との乗り入れの計画もあって、「新宿は、大昔はよかったが、最近は大分落ち目」という話が浮上してきていると実感している。
- 時代的なサイクルから考えると、１周回って、次の２周目に入るときに、「次は新宿が何かやらないといけない」というような話を耳にする。
- 例えば、建築基準法の関係で設けられている高層ビルの公開空地をニューヨークのブ

ライアントパークみたいに、それぞれの広場をうまく有機的に結合させて、まちの魅力として発信できないか。

- 「言うは易く行なうは難し」かもしれないが、文化的視点も含めて壮大な構想を提案していって、次世代の活性化として２周目のサイクルに、新宿がまた先頭に立って行きたい。
- ビルバオ等の都市の例にみて、創造都市や創造階級がまちの活性化につながっていくというものの考え方をもう少し深めて、さらには活用していくというのが今後有効になるのではないか。
- 昨年のフィールドミュージアム期間に、新宿文化センターで「オール・チャイコフスキー・プログラム」を演奏したが、今年はオーケストラがないので残念だ。
- 子ども向けの音楽教室を実施するにあたり、ただ「新宿文化センターでやります」というだけではなくて、事前に区内の各学校を回り、４～６年生を対象にプレーヤー１人を派遣し、専門の楽器を使い、事前にレクチャーした。
- そうすることで、子どもたちは、演奏で使われる楽器のことも知っているし、会ったことのある演奏者が実際に演奏するので、本番のコンサートに積極的に参加してくれる。
- 演奏会に来られない方々にはこちらからどんどん出かけていって、演奏できる機会があればよいと思う。
- もっと壮大な計画としては、新宿御苑で野外コンサートでもできれば面白いし、とても盛り上がるのではないかと思う。
- クラシック音楽だけではなくて、いろいろな分野の音楽や芸能の舞台として、野外も活用していければいい。野外コンサートは海外ではよくやっているが、日本では雨が多く、実際にはなかなか大変だが、そういうこともやっていければよいと思う。
- 区の施策が奏功してか、ここ１０年は、区内の０－５歳の人口が大変増えてきている。乳幼児の文化体験活動を区との協働で展開してきている。
- 新宿文化センターのあり方について、第１期会議ではなかなか議論の広がりを見せられなかったので、今後は、例えばオーケストラなどのアウトリーチの場として、新宿文化センターを活用していただきたい。
- 小学校や幼稚園、中学校等だけでなくて、どの子でも身近なところで文化を体験できる場をできるだけ増やしていきたい。大人がきっかけづくりをしてあげることで普段なかなか経験できない子どもたちが、文化センターに足を運ぶようになることもある。
- 以前、東京交響楽団が戸山小学校で開催した出張教室では、参加した子どもたちがぜひ今度はチケットを買って実際に行ってみたいと言っていた。
- 点から点ではなく、点から線になって、さらには面になるような、文化面のボトムアップということで、小学校等の義務教育の場から、ぜひ地域に広がりを見せるような取り組みを期待している。
- 新宿文化センターでは友の会等の制度も計画しているようなので、多くの区民の声を聞き、できるだけ多くの方が足を運ぶことができる施設となってもらいたい。
- 新宿文化センターのある地域は、ビルの開発が進んできたこともあり、より一層、文化センター近辺だけが周りのきらびやかな景観に比べると古い感じがする。

- 何か少し工夫をして明るい感じになり、さらには文化センターが区の芸術のさらなる拠点になるよう期待している。
- 教育現場では、教員は他区や他市から赴任されていることが多く、５年、６年の異動のサイクルでは、新宿区の文化財や伝統芸能に対して知識的に足りていないところがある。
- 教育現場に対してのコーディネート力をぜひ区に発揮してもらいたい。そして、文化財や伝統芸能に関する情報を教育現場で活用できるようにしてもらいたい。
- 新宿には日本舞踊をはじめ、人間国宝がたくさん住んでいる。新内や長唄等、伝統芸能に携わっている方が区内に数多くいる。
- 区内には矢来能楽堂もある。
- ２８の提言に対する取り組みについては、第１期会議でまとめられたものなので、引き続き第２期でも検証しながら、さらには何か新しいものを提案できればよい。
- 新宿フィールドミュージアムという言葉自体は、まだまだあまり浸透していない。今後の取り組みとしては、実際にプログラムやチラシにロゴマークが印刷されている等工夫すれば、もう少しフィールドミュージアムが利用者にも浸透していくのではないか。
- ロゴマークをいろいろな印刷物等に使おうということは前回からもやっているが、たしかに浸透するには時間がかなり必要である。
- 「文化芸術」は本当に多岐にわたっているが、もう少し分野を細かく分けて、それに合わせた催し物があるとよい。
- 定期演奏会を開催するにあたり、招待演奏という形をとり都内の小・中学校の金管バンドや吹奏楽団等に３０分間舞台を開放して、好きなように演奏してもらっている。招待演奏の取り組みの中で、子どもたちに自分たちの演奏会を体験してもらい、将来的には一緒に演奏できればよいと思う。
- 第２期の審議事項としても、２８項目の提言に対する取り組みを確認していくことになったが、次回会議までには、実際に審議する際に「２８項目」という言い方を使った方がいいのか、むしろテーマごとに整理して議論した方がいいのか、審議の進め方について、専門部会で整理してもらいたい。
- 審議の進め方を決定したうえで、２８項目の今後の展望、着地点を考えることとし、議論を重ねる中で、提言に対してどのような目標設定していくか、あるいはこの会議の今後の活動、見通しをつけていくかということを考えていきたい。
- 演劇、特に伝統芸能の分野については、なかなか子ども向けの講座が実施されていないように思う。一方、矢来能楽堂では年に１回、夏休み期間中に子ども向けの講座をやっている。
- 新宿区名誉区民には、そうそうたる伝統芸能関係の方がいるにもかかわらず、区として十分に活用していないのではないかという気がする。
- 音楽や美術の分野に比べ、子ども向けのイベントの中で一番弱いのが演劇の分野ではないか。
- 能楽や歌舞伎や人形浄瑠璃文楽が無形文化遺産になっているが、こうした遺産になったというのに、この間の大阪市長のように文楽に対する補助金の見直しというような

暴論が出るくらいに、伝統芸能に対して本当に理解がなされていないような気する。

- 若い人も大人も含め、海外へ仕事その他で行かれた方が、プライベートな時間で必ず話題になるのは、自国の伝統芸能のことだと思う。
- 外国の方から日本の伝統芸能について質問されても、「ミュージカルのことはよく知っているが、歌舞伎や能楽を見たことない」と、非常に恥ずかしい思いをしたという話をよく聞く。
- 子どものときから自国の伝統芸能に触れる環境がなくて、また、そのような環境が親世代にも浸透していないのだと思う。そうした環境づくりは、家庭でできなければ学校や新宿区のような行政が取り組まなければいけない。
- 話に出ていた、損保ジャパン東郷青児美術館のように、小学生に対して絵画鑑賞教室のような取り組みをやることは非常に良いことである。音楽の分野でもそれと近いことが実施されてきている。では、同じようなことが演劇、特に伝統芸能の分野でもできないか。
- 早稲田大学にある演劇博物館では「小・中・高校生向けの演劇」というタイトルで３年間取り組んでいたが、学校側の反応が非常によくない。
- 演劇博物館に子連れのお客様に、「どこから来たか」と聞くと新宿区の人はほとんどいない。貴重なものとして１都６県から子連れで来館し、これを機会に親子ともども歌舞伎を見たい、文楽を見たい、能を見たいと言ってくれる人の中に、地元の新宿区の人がほとんどゼロという実感がある。
- 新宿区はせっかくこのような良い環境、良い資源があるのだから、もっともっと活用して、何らかの道をつけなければいけないのではないか。
- 第１期会議からずっと話題に挙がっていたが、ネットワーキングやコーディネーションの機能について、そろそろ各論に入っていく段階なのではないか。
- 新宿区がもつ資源の中で、非常に重要な潜在力が大きいと思われるのが新宿未来創造財団であり、本日も話に出てきている新宿文化センターがある。
- いわゆる「新宿力」を高めるために、今ある資源をどのように活用していくのかを一度きちんと整理をしていき、議論を進めることが必要だと思う。
- 新しい投資を考える際に、新宿のまちを、ソフトとハードと両方合わせて、ある意味都市計画、産業構想、あるいは文化活動等を融合させて、安らぎのある、しかもにぎわいと活力のあるまちに育てていき、これをどのように守っていくのかという大きな目標に向かって取り組んでいく必要がある。
- これは一気に実現することはできないが、最初である１期目はフィールドミュージアムというプラットホームをつくったことにより、まずは社会実験によって、さまざまな課題や、次にやるべき課題が見えてきて、長期の目標である安らぎと活力のあるまちづくりに向かっての方向性が見えてくるように取り組んできた。
- 少しずついろいろな芽が出てきているが、まだ解決すべきことがたくさんあるので、フィールドミュージアムを中心にしながらも、まちの活性化、にぎわいを創出していくための新しい投資のあり方を考えていく必要がある。
- お金のことだけではなくて、しかも行政である新宿区だけで持ち切れる話ではないので、企業等をどのように巻き込んでいくかを考えたい。

- お金の出し方といってもいくつかやり方があって、最近の例では、丸ノ内エリアで、空中権を売ってＪＲ東京駅の改修費を捻出したという話がある。これは新国立劇場がまさに全く同じやり方でその建設費を捻出している。
- 公開空地をはじめ、新宿には本当にいろいろな資源がある。これらをどのようにうまく活用しながら、必要なリソースを捻出していくのかということを、第２期目では議論していく段階にあるのかもしれない。
- ２８の提言の中にも、まちを劇場に見立てた街角や空間のプロデュースとか、そういったような非常に規模の大きな話が出ているが、なかなかそこまでは一気には行けない。昨年度のフィールドミュージアムという社会実験をもとに、少しずつ改良を重ねて、実用化に向けて走っていくというのが、２期目の大きなテーマという感じがする。
- 昨年のフィールドミュージアムは短期間に一気にやったことで、十分に通じなかった部分もあるかもしれないし、それからフィールドミュージアムというネーミングにまだなじみがないということもあったかもしれないので、この取り組みはやはり今後とも続けていくべきだろう。
- 従来の蓄積を踏まえることも必要だが、ある程度テーマを絞ったらいいのではないか、文化月間のプレ・アフターの扱いという意見も出てきている。
- これらのことをしっかりと考えることは、文化芸術活動そのものにかかわってくる。
- 教育との関係や、ネットワークづくりについては、もちろんある一定の期間だけではなくて、経常的に取り組んでいくべきことである。
- ネットワークづくりについては、コーディネート、マネジメントということが必要ではあるが、では具体的にどのようにやっていくのか、まだまだ議論していかなければいけない。
- 専門ごとのネットワークについては、美術館系ならこういうことができる、あるいは演劇関係ならこういうことができるということを、地域を越えていろいろチャレンジしていくことが大事である。
- ネットワークづくりを考える際には、それが一体どういう形で、一般の方や文化に関連していない人にも到達できるようになるのか、そういうしくみを考えることも大事である。
- ネットワークづくりの仕組みでは、それぞれのＮＰＯなり、文化センターなり、新宿区の財団なりがどういう役割で取り組むのか、あるいはそれらをコーディネートしながらどのように進めていくかということを整理することもとても大事である。
- 演劇関係では、子どもたちへの継承等、啓蒙活動をどのように取り組んでいくのか。これは学校関係との協力がいろいろ必要になってきます。
- 学校に対して活動の呼びかけを行っても、学校の方でなかなかプログラムに入れられないという話は地方の美術館等でもよく聞く。
- 大原美術館でも取り組んでいる。例えば休館日を利用して小・中学生を無料招待して、実際に美術館に来てもらうと大変喜ばれるが、なかなかそういう時期に合わせて、学校の教育の中にうまく時間がとれないということがある。
- 金沢２１世紀美術館では、市内の小学生全員を美術館に招待したという話もある。そ

のときも学校側では負担できないバス代をどうするかという問題から始まって、様々な課題があったと聞いている。教育委員会とかなり相談していかないと実現できなかったことだと思う。

・特に文化芸術に関しては、子どものときから身近に触れることが大変大事である。

・小学校時代に美術館に来た人というのは、最初は訳がわからなくて来たかもしれないが、必ず繰り返して来るようになる。逆に言えば、そのような機会がなければ全然縁がなくなってしまう。これは美術館だけではなく、芝居や文楽等の伝統芸能も同様である。

〈閉会に際しての区長あいさつ要旨〉

・新宿駅周辺、例えば西新宿の高層ビル群の公開空地をどう活用していくのか。まちのにぎわいというのは、やはり文化なくして成り立たないと思う。

・例えば、新宿クリエイターズ・フェスタでは、開催エリアを新宿駅周辺まで広げ、名誉区民の草間彌生氏、東京大学の河口洋一郎氏、アートフロントギャラリーの北川フラム氏にご協力いただき、たいへん盛大に実施することができた。このイベントにかかる経費はすべて企業にご協賛いただき、行政だけではなく、まち全体で取り組んできた。

・まちが元気でにぎわいがあり、いつも活力を持っていることは、人々が生き生きと生活していくことにつながり、福祉もきっちりできるためには、まちが元気でないといけない。そういう意味では、「文化」が本当に大切だと考えている。

・産業についても、文化創造型産業が必要であり、専門部会では、いろいろな新しい投資のあり方を議論してもらいたい。

・公開空地におけるにぎわい等について、例えばハードの面で今、新宿のまちはとても大事なときを迎えている。先日、新宿駅の東西自由通路がついに着工となった。この東西自由通路は、単なる回遊性を高めるという工夫だけではなくて、いわゆる「歩きたくなるまち新宿」として、追分から淀橋までつなげていく。

・人々から見て、歩きたくなるというのは、そのまちに文化があるということであり、商業や産業から見たときには、商業空間であったり、産業の可能性のようなものであったりするのだと思う。

・委員の意見を聞きながら、「新宿は文化が一番」であることで、いつまでも生き生きできるまちでありたいと思っている。人々が豊かに暮らせるようなまちづくりを目指したい。

９　次回日程について

第２回目の会議は、１２月頃に開催予定とし、日程や会場等については、別途事務局から連絡することとした。また、専門部会は、部会員と相談のうえ、１１月頃に開催予定とするとした。

１０　閉会

会長のあいさつをもって、午後５時に閉会した。